



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

仕事・賃金・生きづらさ

朝日新聞で「いま先生は」シリーズが始まった(11月29日朝刊)。朝日新聞は、教育問題に関して一定の問題提起を続けてきており、少し昔になるが、「いま学校で」シリーズは様々な教育現場の実態に光を当てた実績がある。今回のシリーズは「いま学校で」の時代よりももっと様々な問題が「詰まっている」と思われる現在の学校現場に、どのような角度からライトを当ててくれるのか期待したい。

第1部では、授業に力を注げない先生方の仕事の実態を伝えるということで、シリーズの第1回では、事務作業等に追われ、授業の準備に時間を割けず、授業が「ぶっつけ」になってしまうことや、学校独自の「意味を感じることができない取り組み」などが報告された。

子どもたちが多様化する中で、個々への対応が強求められる一方、事務的な作業も明らかに増えた。その上、指導すべき内容も増加し、新しい課題が次々と学校に「放り込まれて」くる。ましてや、子ども同士のトラブルを解決したり、保護者への連絡など、子どもへの「安全の提供」や保護者の「納得・理解」を要求される度合いが、年々高くなっているのは事実だ。しかし勤務条件は変わらず。「定額働かせ放題」とは、よく実態を言い表している。サービス残業とはいっても、体の良い「タダ働き」ではない。その理不尽さは全国の教員の誰もが身にしみて感じている。「働き方改革」と言われても、仕事が減るわけでもないし、残業代がもらえるわけでもないし、所詮は絵に描いた餅。「働き方改革」を信じている先生がいるとは思えない。忙しさを教員のせいにし、「やり方によってはなんとかなるでしょ!」と強弁しているとしか思えない。「タダ働き」を制限しようとしているのだから、どういう根拠でそんなことが言えるのかもわからない。埼玉の教員が残業代の訴訟を起こしたが敗訴。道のりは遠いようだ。

このような実態を背景として、心身の不調を訴える先生も多い。教育への理想や情熱は持ちつつも、そこに繋がらない日々の「仕事」とのギャップが先生方を蝕んでいく。「つぶれないように、毎日が必死」という先生も多いのではないだろうか。どうすればいいのか!?

絶対に必要なのは、まずは教員の人数をしっかりと増やし、一人ひとりにかかっている負荷を減らすこと。残業代を支払うのは当たり前! 法律違反の実態があるのは明白だ。世界のレベルから見ても、日本の教員の労働が過剰であることは数字が示しているのだから…。早くなんとかして欲しい!

しかし、このように考えてくるととても気になるのが、こうした実態が教員だけではなく、どうやら日本社会のあちらこちらから「低賃金」「過重労働」「過剰なストレス」といった問題として聞こえてくることだ。日本中の職場が「ひどい状況」になっていて、働くことが楽しいなんてとんでもない、うまく行かない自分を責めるか、自分より弱い立場の人を責めるかしか道がないところに押し込まれているのかもしれない。

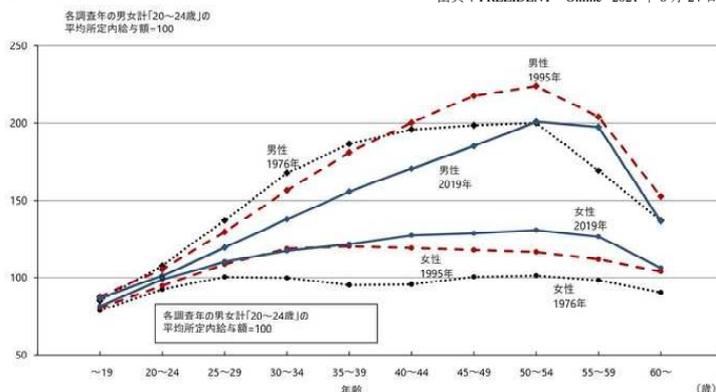
この間世界中で、熱に浮かされたように推し進められてきた新自由主義路線が、一部の人間達を裕福にし、埋めることのできない格差を広げたことはもう周知の事実である。「勝ち組」はますます少数となり、それ以外は「中流」ではなく、明らかに「負け組」となる社会構造が出来上がりつつある。こうなると「勝ち組」になれない多くの人々は、自分の人生「いかに」「どの段階で」諦めるかということになる。早ければ社会に出る前に「諦める」ことになる。それがいま若者の間で使われているという

「親ガチャ」という言葉なのだろう。自分のせいではない、生まれた家庭で「貧乏くじ」を引いたのだ、と自分に言い聞かせるしかない。

こうした実態とは裏腹に、国民の「生活満足度」は上がっているというから驚きである。識者の分析では、「満足度」というよりは「これ以上の高望みはしない」という意識の表れらしい。「今あるものをなくさないように守っていく」姿勢というのは、庶民的な感覚とも受け取れるが、為政者や経営者にとっては好都合なのだろう。低賃金であっても高望みはしないでじっと我慢する国民…それが「日本」ということにな

図表1 現在も残る男女の賃金格差

出典: PREZIDENT Online 2021年6月24日



るようだ。

しかし、「高望みはしない」では済まされない人々も居るはずだ。例えば「女性」である。女性が抱える働きづらさや生きづらさは今始まったばかりではない。それこそずっと歴史的に弱者の位置に押し込められてきた。それが、今回のコロナウイルス感染によるパンデミックの中で、あらためて浮上してきている。しかも、もうどうしようもない、切羽詰まった追い込まれた状況として浮かび上がってきていることに、私たちは目を向けなければならない。

例えば、賃金格差。図表1を見てほしい。働く者全体の実質的な賃金は年々下がっており、現在の生涯賃金は親の世代よりも明らかに低い。つまり、現在の現役世代は親世代と比べて確実に貧しくなる、ということだ。なおかつ税金等の「負担」はしっかりと増えている。それに加えて、雇用形態による賃金格差。つまり、正規雇用か非正規雇用かで大きな差がある。まして女性労働者となると、男性労働者とは賃金差別といえるほどの差がある。そして、何年経ってもこの差は縮まってこなかった。社会の経済状況の影響をまともに受けるのは、まずは「女性」ということになる。

また、このコロナ禍、自殺が増えたことがマスコミで取り上げられたが、ここでも男性よりも明らかに女性の自殺者の方が多かった。

20年の自殺者数は全国で2万1081人と、前年比で912人(4.5%)増加した。増加は11年ぶり、男性は減少したものの女性の増加幅が上回った。無職の女性は微減、男性は職の有無に限らず減少しており、働く女性の自殺増加が顕著だった。月別で見ると前半は例年より少なく、後半に増加した。緊急事態宣言中の4月は前年より300人以上少なかった一方、感染が落ち着いていた10月は700人近く多かった。必ずしも、経済活動が抑制される感染拡大期に増加しているわけではない。10月は、無職女性の増加も目立った。

(日本経済新聞 2021.11.2)

うつ病も男性に比べて圧倒的に女性に多い。

男女比:男性 49.5 万人 女性 78.1 万人(厚生労働省 患者調査 平成 29 年)

理由:ライフコースの決断を迫られる/仕事と家事・育児や介護との両立/家族の介護/睡眠不足/男性優位な社会で仕事をする事/「若く美しいことが女性の価値」という社会通念のもとでの老化/女性の方がコミュニケーション能力が高い分、人間関係が複雑になりやすい。(WOMAN'S LABO 2019.4.4)

低賃金の不安定な雇用と、家事や育児に追われる生活が女性を追い詰める。男性は追い詰められながらも、社会構造的には女性を追い詰める側にもまわっている。

教職員の働く現状、格差と親ガチャ、女性の生きづらさと私たちの身の回りの現実を取りあげてきたが、これらは別々の問題ではないと思う。地続きにある、すぐ隣の問題なのだ。みんながこうした状況から抜け出したいと思うのは当たり前だが、しかし出口は見える兆しもない。「高望みしない」という考え方も、徐々に格差が広がりつつある現在、いつまでもそうは言っていられないだろう。

当然地続きの問題であるだけに、教育も無関係ではない。例えば、学校現場では男女平等と教えていても、社会ではこれだけ大きな男女格差があるのであれば、平等と言って、現実目に向けなければ、それはごまかしでしかないではないか。例えば、シングルマザー家庭の養育や生活の大変さには、実際学校現場で出会っていて、子どもたちの生活背景の問題として感じる事が多々あるはずだ。

以上のことから、Ed. ベンチャーは来年度の共通活動テーマとして「女性の生きづらさを考える」を掲げる。女性の生きづらさの実態はどのようなものなのか、子どもたちはいつ頃から女性の生きづらさを意識するのか、学校では何をどのように伝えていく責任があるのか……。是非多くの方とともに考えたいテーマである。

訃報 私たちEd. ベンチャーの事務局長であるGYさんが10月にお亡くなりになりました。65歳でした。あまりに突然の出来事であり、仲間の私たちもどう受け止めていいかわからず、今深い悲しみに暮れています。GYさんは中学校の社会科の教員として、子どもたちに寄り添い続けた人生だったと思います。特に弱い立場の子どもたちに対して、休日や夜の時間に、よく面倒を見ていた姿を、私たちは忘れません。GYさんの意志を継ぎ、これからもEd. ベンチャーは、子どもたちと先生方が必要とする活動を展開していきます。GYさんのご冥福を心からお祈りいたします。 Ed. ベンチャー一同

【理事の一言】 少し前になるが、以前通っていた町田のフィットネスクラブのコーチから「いじめの自殺があって、保護者会があるんです」という話を聞いた。そういえば学校で配布されたタブレットに悪口を書かれ6年生の女子が自殺という記事を思い出した。知り合いの話で、何だかとても身近な事件に思われた。それにしてもその子はどんな思いで、どれほど悲しくて死んだのか、何とも痛ましい、やりきれない気持ちだ。コロナで休校、ITの導入、授業は進める。当然といえば当然だが、こうしたいじめが起こるのは想定内のはずである。それを防げないとは。教育は元々手間と時間のかかるものではないのか。そのことを教育に携わる者たちがあまりにも忘れ去っているのではないのか。こうしたことが二度と起こらないことを祈るばかりである。

事務局長の訃報を伺い、大変残念に思います。ご冥福をお祈りいたします。(TT)